

大学で学ぶ帰国生の実態調査 －国際基督教大学の場合－

山下 早代子・石垣 貴千代

I はじめに

国際基督教大学（以下ICUと呼ぶ）には多数の帰国生（注1）が在籍しているが、近年その帰国生たちの経歴は非常に多様化している。海外で生まれて大学入学のために帰国するまで日本の土を踏んだことがなかったという帰国生もあり、そのかかえる問題は多岐にわたる。日本語科では1964年から日本語の基礎力をつける必要のある学生を対象に特別な日本語補習コースを開講しているが、一般に言われている帰国生の言葉の問題は単純に技能面のことだけでなく、文化や社会の違い、一般常識、知識、精神面にかかわる部分も大きいと思われる。学生のレベル、ニーズにより合った日本語プログラムを考える上でも帰国生の実状を知ることは不可欠であるが、現在までそのような調査は行われていない。そこで、ICUの帰国生の実態を明らかにするためにアンケート調査を行うことにした。本稿では1989年6月から同年12月にわたって収集されたデータに基づいてICU帰国生の実態を考察する。

II 調査の背景と目的

1. 背景

（1）帰国子女教育

帰国子女の問題が社会的に取り上げられるようになってから久しい。昭和46年時に8、662人であった海外在留邦人子女数（文部省、1979）は、昭和62年には41、155人となり（総務庁行政監査局、1988）この大多数は数年外国に滞在した後、帰国し、帰国子女として日本の教育を受ける。

近年、帰国子女の初・中等教育は社会の要請が強くなったこともあり、受け入れ機関の充実が飛躍的にはかれるようになった。各地に帰国子女受け入れ校、帰国子女教育研究協力指定校が設置され、高等学校・大学レベルでは帰国子女枠による特別入試制度も実施されるようになった（長谷部、1985）。

しかし、初・中等教育で行われる帰国子女教育は、生活適応教育（日本の生活・習慣に習熟し、日本人らしく生活できるようになること）と、学力適応教育（日本人として必要な日本語運用能力の習得と基礎科目の補習）が中心で、帰国子女がもっている国際性、国際感覚を保持し、伸ばそうという積極的な教育はまだ十分ではないという指摘もされている（池田・山崎、1982；小林、1981；東京学芸大学海外子女教育センター、1986年）。

一方、高等レベルでの帰国子女教育は、高等学校・大学の帰国子女枠（注2）

による特別入学試験が様々な国・公立・私立学校機関で実施されるようになり、帰国子女と認定された学生の機関への入学にも配慮がみられるようになった。また慶応義塾大学では帰国子女枠で合格が決定した学生に対し、11月から正規の入学が行われる4月まで、「帰国子女研修過程」と呼ばれる補習教育コースを実施している（孫福、1983；山本、1985）。孫福は、これは帰国子女が長期に渡る外国生活と外国の教育制度のもとでの学習の結果、高度の日本語表現能力や、日本の教育制度のもとでなければ深く学べない日本歴史、日本地理、日本の政治経済などの知識の点で入学後の学業遂行に不安を覚えているので、その不安を解消し、大学生活に支障が生じないように手当をする目的で開講されるものであると述べている（p.31）。早稲田大学でも慶応義塾大学と同様の予備教育を行っているが、一方ICUや聖心女子大学では入学後に日本語、特に漢字や読解の補習授業を行っている（石垣、1987）。まったく補習授業を行わない大学機関も多い。

（２）ICUの帰国生

ICUには約2300人の在学生（学部、大学院生、留学生を含む）がいるがこのうち300人程度が帰国生であるとみられる（注3）。ICUには通常の入学試験における帰国子女枠はなく、かわりに9月に書類選考によって帰国生を受け入れている。この選考では、日本以外の教育制度の下で教育を受けたと認定された学生が当該国の教育制度による大学入学資格試験、あるいは統一試験等の証明をもって入学とするもので、次の2つの条件のいずれかを満たした者が対象となる。

①日本以外の教育制度の下で教育を受けた者

②最終学年を含んで2年以上日本以外の教育制度の下で教育を受けた者

毎年およそ90名ほどが入学し、内95%は日本国籍を有し、そのほとんどが帰国子女であるが、中に①の条件を満たす国内のインターナショナルスクール出身者が若干名含まれる。帰国生としては、この他にICU高校からの推薦により入学してくる学生が若干名いる。

ICUの帰国生の経歴は、海外滞在時における年齢、滞在場所、年数、学校歴、家庭環境、日本語力等にいたるまで様々である。日本で小、中学校教育を受け、高等学校の最後の2年間だけを海外で過ごした後に入学してくる学生もいれば、外国で生まれ育ち、ICUに入学するため初めて日本に来たという学生までおり、帰国生の中でも日本語能力、生活意識等に相当な差異があると考えられる。稲垣（1987）は学力テストの結果から、帰国生が日本語能力の4技能のうち漢字の読み書きに弱く、高度な講義や文献を理解したり表現したりする能力や敬語を使用することなどについても十分な力があるとはいえないので、そのような力を伸ばし、言語生活の内容を高めるような日本語教育を行う必要があると述べている。海外滞在期間の長い学生ほど漢字、語彙、読解力が弱く、古典の知識や、日本の義務教育で学習するような基本的な知識や習慣、一般常識の点でも弱いと思われる。帰国生自身も日本語力を含めて生活全般に対する不安、不満、将来への不安などを訴えている（本調査記述回答参照）。小林（1980、1983）、星野（1983）、箕浦（1984）などが帰国子女の問題として取りあげているカルチャーショックや

アイデンティティの問題なども言葉と密接な関係があり、学生が悩みとして持っている問題である。

(3) 帰国生と「特別日本語」コース

9月に書類選考で入学する学生は、入学後クラス分け用の日本語能力試験を受ける。成績によって「外国語としての日本語」コースか、「特別日本語」コースを受講することになる。(成績がよい場合は免除される。)

帰国生の多くは外国語としての日本語の能力を見る Placement test ではなく日本語コース免除試験である Exemption test を受けるが漢字、語彙、読解力を審査するこの試験にパスする学生はまれで(注4)、ほとんどの学生が「特別日本語」を受講する。

「特別日本語」は「日本語の話し言葉はできるが読み書きの能力が十分でない学生のための科目で、読み書きの集中的教育が行われる」とICU教養学部要覧(1990-91年用)に書かれているが、小出(1987)によれば、「特別日本語」は1964年に、当時多かった、話はあるが読み書きは正式に習ったことがないという日本のインターナショナルスクール出身者のための日本語補習コースとして開講したということである。現在は当時と異なり、受講するのは帰国生が中心であるが、授業は週3時限(1時限70分授業)、3単位で開講当時と変わっていない。「特別日本語」1(秋学期)では主に教育漢字、常用漢字の練習、「特別日本語」2(冬学期)では漢字と語彙、テキスト講読、「特別日本語」3(春学期)では漢字と講読のほかに講義ノートの取り方、レポート、その他の文の書き方を練習しているが、「特別日本語」3の終了時に確実な進歩が見られる学生がいる反面、十分な力のつかない学生もいる。一定の時間内で、それぞれ違った背景を持つ学生に必要な日本語力を補習するのであるから、教材や授業の方法が学習成果に与える影響は大きいと考えられる。

2. 目的

1で述べたような多様化した帰国生のための日本語コースの内容(教材や授業時間数など)は学生の背景の変化と必要に合わせていかなければならないことは明らかである。「特別日本語」コースの最終目標は、学生が大学の講義を聴き、テキストや文献を読み、レポートを書けるようにすることであり、その目標に変わりはないが、受講する学生の状況が変化すれば、目標達成のための効果的なカリキュラムの検討が必要となる。そのために、まず現在の学生の実態を把握する必要があるだろう。本調査は現在のICU帰国生の実態(育った環境、ニーズやレベル)を明らかにすることにより、帰国生のための日本語教育カリキュラムを考えるための基礎資料とする目的で実施した。

調査では、帰国生の、1)基本的属性(注5)、2)言語環境、3)意識構造、4)日本語学習、の4点を中心に質問した。

Ⅲ 調査の対象等

1. 調査対象

この調査の対象は、ICUの1989年度春学期の「特別日本語」3の受講生45名、同秋学期の「特別日本語」1の受講生32名、冬学期の「特別日本語」2の受講生の中の「特別日本語」1の受講生を除く学生15名、合計92名であるが、有効数は74となっている（注6）。なお用紙は無記名とした。

2. 調査方法等

調査実施時期は

① 1989年 6月 （対象「特別日本語」3）

② 1989年 9月 （対象「特別日本語」1）

③ 1989年 12月 （対象「特別日本語」2）

である（注7）。調査表（アンケート用紙）は3つのグループ全て授業後にクラス内で回答を書き込んでもらいその場で回収したので、回収率は100%になるが、うち有効調査表は80.4%である（注7に同じ）。

Ⅳ 調査の結果と考察

1. 基本的属性（フェイス項目：注8）

1) 年齢

年齢は大学学部生として高校卒業後すぐに入学してくる学生がほとんどなので、18～19歳が77%をしめた。

2) 性別

性別は女生徒が53名、男生徒が17名で女生徒が男生徒の約3倍になっている（記入もれ4）。

3) 母国語、および母国語と同程度に話せる外国語

母国語が日本語であると答えた学生は65名（88%）で、母国語が日本語ではない、とする帰国生は12%いた。海外滞在歴が幼少の頃に始まり、長期に及んだ場合、母国語が必ずしも日本語とはならない。

また母国語と同程度に使用できる他言語があるかどうかについては英語と答えたものが66%、その他の言語7%となっている。長期に渡って滞在した帰国生の場合、外国語というより第2言語、第3言語として言葉を習得している場合が多く見られる。

表 1：母国語および母国語と同程度に話せる言語（N = 74）

	日本語	英語	日・英*	仏語	スペイン語
母国語	65	4	1	4	—
母国語と同じ	3	49	—	2	3

*日本語と英語の両方が母国語であるとしている。

4) 父母の海外滞在経験

海外滞在年数は父母共に11年（15%）、20年以上（15%）というのが一番多かった。父はさらに15年～19年（15%）、4年、9年（各9%）、が多くなっている。母は15年、9年（各11%）が多い。長期の海外勤務者の子弟が多いことがわかる。

5) 父母の職業

父の職業は会社員が80%、母は主婦が85%近くをしめた。

選択肢：政府関係（外交官、役人など）、会社員（企業など）、研究員（大学関係者など）、教員、自由業、医者、弁護士、商業関係、主婦、その他。

6) 現在の生活状況

「だれとどこに住んでいるか」という質問に対し、親、兄弟等肉親と住んでいると答えた者が62%、残りは大学の寮やアパートなどに一人で生活していると答えている。アパートに住んでいると答えた学生の中に、外国人の夫と住むと答えたものが1名いた。

2. 言語環境

0歳から現在まで、1年毎に年齢区分をした表を用いて、言語習得に関連すると思われる以下の質問項目に対してそれぞれの年齢ごとに回答させた。これらの質問により、帰国学生の過去の言語環境を明らかにすることを目的とした。

1) 海外滞在のべ年数と滞在時の年齢

表 2：海外滞在のべ年数

のべ年数	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
人数	1	3	4	3	5	8	13	4	9	5	1	6	4	1	0	3	3	1

表 3：海外滞在時の年齢

年齢	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
人数	19	25	25	25	27	31	35	36	33	30	35	32	35	46	55	62	67	62	31	7	4

海外滞在のべ年数は8年が最も多く（13名：18％）、ついで10年、7年と続く。17年以上が7名（9％）いる。海外に滞在していた時の年齢を見ると、学齢前にいたことがある帰国生が約1／3（34％）いるが、12歳以上はさらに多くなっている。9月生の入学条件は日本以外の教育制度の下で教育を受けた者か、最終学年を含んで2年以上日本以外の教育制度の下で教育を受けた者ということになっているので、当然ながらほとんどの帰国生が高等学校時に海外にいた経験がある。滞在のべ年数と滞在時の年齢を見ると帰国生の多くが義務教育期間の大部分を海外で過ごしてきたということがいえる。

図1：海外滞在のべ年数

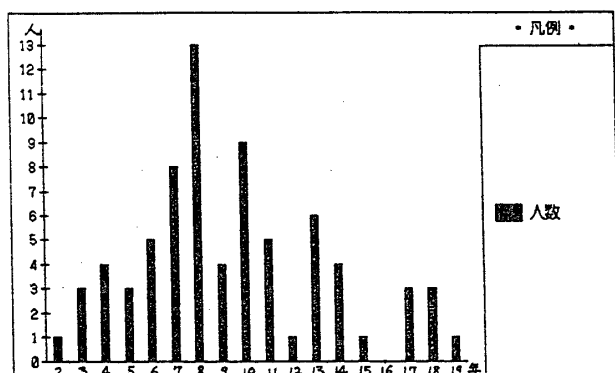
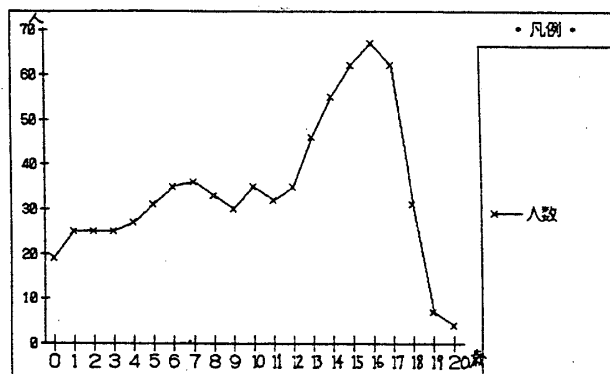


図2：海外にいた時の年齢



2)現在までの居住地

北米が78％で1位、以下欧州（24％）、アジア（23％）が滞在経験のある地域となっていて、英語圏滞在者が大きな割合をしめる。（複数回答）。

表4：滞在経験のある地域とのべ人数（＊）

地域	北米	南米	アジア	欧州	中東	アフリカ	豪州
人数	58	2	17	18	4	5	5

＊同一学生が複数回に居住した地域は1回として数えた。よって、北米58名というのは、被調査者74名のうち、58名が少なくとも一度は北米に住んだことがある、という意味である。

3)海外滞在時の日本語学習

現地校に通学しながら補習校（注9）に通学したと答えた者が65％いた。通学しなかったと答えた者は高校の時期に高校レベルの補習校がない場所に滞在していた、補習校自体がない場所であった（チェコスロバキア、インドネシアなど）、誕生から長期に渡っての滞在のため、現地校だけですませていた、などの理由による。なお、全日制日本語学校に通学していたと答えたものは4％いた。日本語維持の手当としてはこの他通信教育、国内の大手進学塾の現地塾などがあるが、アンケートの質問項目に含めなかった。今後の調査には含める必要がある

だろう。補習校通学期間は6年間で17%でトップ。15年と答えた学生が1名いた。15年というのは義務教育12年と高校レベルの3年間で全て海外で送り、その間を現地校に通学しながら補習校に通学し、日本語維持に努めたということになる。長期に渡る海外滞在者子弟が日本語維持のために努力をしている様子がうかがえる。

ICUでは帰国生の中の長期滞在者で補習校へ通学するなどの日本語の手当をしてこなかった9月生の場合、入学時に実施される日本語学力試験の結果、「特別日本語」クラスに入れず、「外国人のための日本語コース」に登録を与儀なくされる学生も少なくない。同試験によって「特別日本語」に登録資格を与えられながら、自信がない、外国人と学ぶ方が自分らしくなれる、などの理由で、自分から「外国人のための日本語コース」に行く者もいる。単純に日本語学力だけの問題でなく心理的な要素も含まれていることがうかがえる。

表5：日本語補習校に通学していた年数

年数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
人数	5	6	5	6	4	8	4	3	2	2	1	1	0	0	1

4) 使用言語をどう使い分けているか

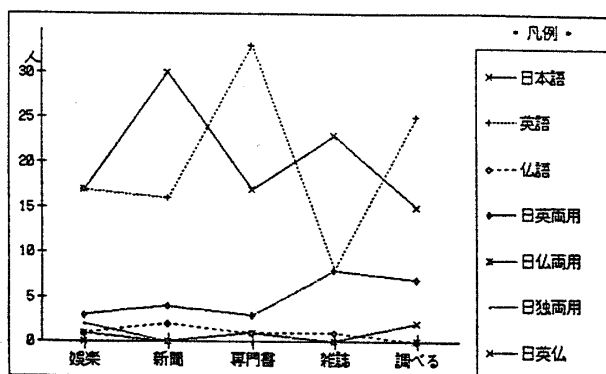
母国語とその他の言語の現在の使用状況を問うことによって、帰国生の言語行動を知ることが目的とした。a.読む時、b.話す時、c.書く時、d.聞く時、の4つの場合にそれぞれ何語を使用するか、具体的な場合を挙げて質問した。

a. 読む時

表6：読む時に使用する言語

使用言語	娯楽	新聞	専門書	雑誌	調べる
日本語	17	30	17	23	15
英語	17	16	33	8	25
仏語	1	2	1	1	0
日英両用	3	4	3	8	7
日仏両用	1	0	1	0	0
日独両用	2	0	0	0	0
日英仏	0	0	1	0	2

図3：読む時に使用する言語



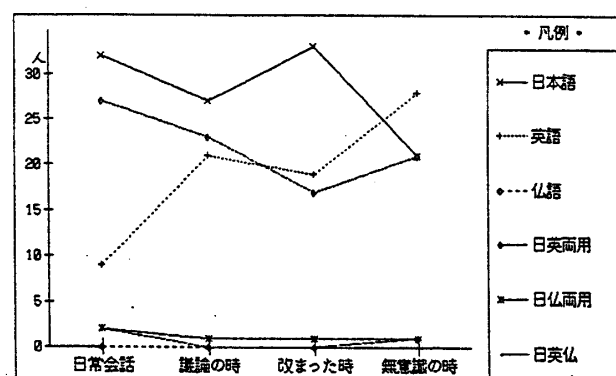
娯楽として本を読む時、毎日読む新聞、専門書、雑誌、何かを調べるとき、それぞれ何語を使用するか質問した結果、新聞や雑誌を読む時は日本語（それぞれ順に41% - 31%）、専門書を読む時や文献を調べる時は英語（順に45% - 34%）を使用する、と答えた学生が多く興味深い。IVの1 - 3)において、母国語が日本語であると答えた学生が88%いたが、この項の数字の結果からすると、言語のどんな面においても母国語として日本語を使用する、ということではないようである。目的によって言語を使い分けている、ということがわかる。これは一般の日本人が「母国語は日本語」と言った時の意味とは少し異なるようである。「母国語とはなにか、」という議論にも発展する問題を含んでいるように思われる。

b. 話す時

表7：話す時に使用する言語

使用言語	日常会話	議論の時	改まった時	無意識の時
日本語	32	27	33	21
英語	9	21	19	28
仏語	0	0	0	1
日英両用	27	23	17	21
日仏両用	2	1	1	1
日英仏	2	0	0	1

図4：話す時に使用する言語



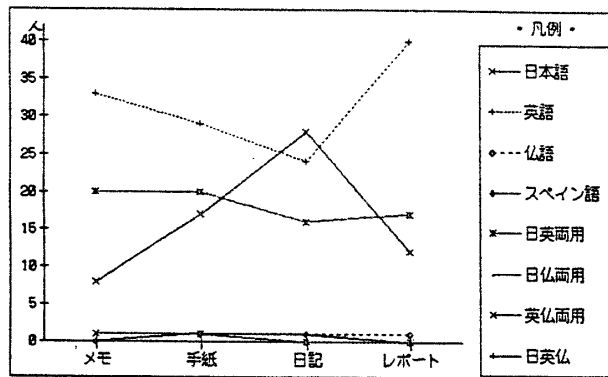
日常会話、議論の時、あらたまった場で考えをのべる時、自然に口をついて出る言葉（あいづち、うれしい時など）は何かを質問したところ、日常会話や改まった時は日本語、無意識の時は英語あるいは日英両用という学生が多かった。相手が日本人かどうか（同じ帰国生同士だったらどうか）で、答えが変わるであろう。話し言葉も読む場合と同様、母国語を日本語と考えている帰国生がいつも日本語を使用するわけではないことがわかる。特に無意識の時は英語あるいは日英両語で話すという回答が興味深い。一般的に言えば無意識の時ほど母国語が使用されるはずである。

c. 書く時

表 8：書く時に使用する言語

使用言語	メモ	手紙	日記	レポート
日本語	8	17	28	12
英語	33	29	24	40
仏語	0	1	1	1
スペイン語	0	1	0	0
日英両用	20	20	16	17
日仏両用	1	1	0	0
英仏両用	1	1	0	0
日英仏	0	1	1	0

図 5：書く時に使用する言語



メモ、手紙、レポートの3つは英語主導、日記に関しては日本語主導となっている。メモ、手紙は相手は何語を使用するかにも関わってくると思われる。これは話す時と同様、相手によって自由に使い分けができるということかもしれない。レポートは英語で書きたいとする回答が圧倒的に多い。これは専門的なことを書く時は日本語よりも英語を使用したい、英語の方が自信がある、ということに他ならないかもしれない。

d. 聞く時

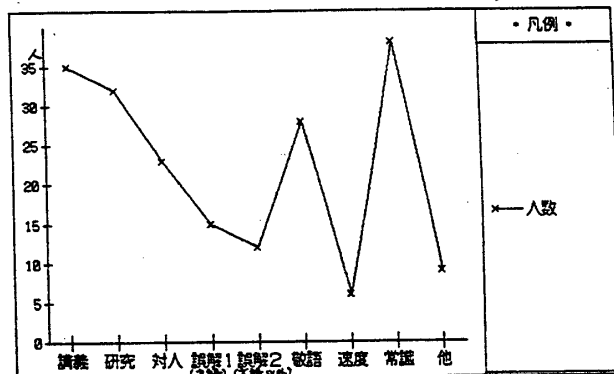
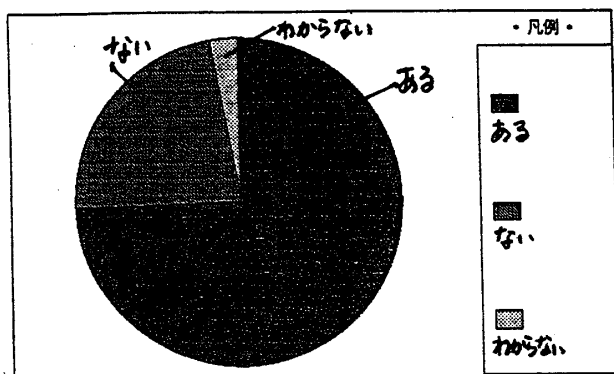
ラジオや音楽を聞く時および映画やビデオを見る時について尋ねた。よく聞くラジオ局、よく聞く音楽（日本のもの；演歌、歌謡曲、ポピュラー、あるいは外国のもの；ジャズ、ソウル、ポップス、クラシック、その他）、見る映画を尋ね、言葉との関わりを探ろうとした。よく聞くラジオ局は日英両語で行われている「J-ウェーブ」などのFMラジオ局の名前が具体的に上がった。また、映画などは見たいものが日本の映画だったら日本語で、洋画だったらその中で使われる言語で聞く、という回答が多かった。対象によって、どちらともなりうる、ということは話す、書くなどとも共通しているように思われる。

5) 日本語でのコミュニケーション

帰国生が自身の日本語運用能力に対してどのように感じているかを知るために日本語でのコミュニケーションで困難を感じたことがあるかないか、困難を感じた具体的な場面を下記のようにリストアップし、その中から選ばせ、具体例を書かせた。

場面のリスト：a)講演・講義などを聞く時、b)研究発表、レポートなどを書いたり発表したりする時、c)対人関係で（言葉の誤解／言葉以外のことに関する誤解、敬語）、d)話すスピード、e)文化的な語彙や表現、常識、f)その他。

図6：コミュニケーションに困難を感じたことがあるか 図7：具体的な場面



75%の帰国生が日本語でのコミュニケーションに困難を感じたことがあると述べている。特に困難を感じた場面として、講義、研究の時、敬語の使い方、常識について、を挙げた者が多かった。そのほか、日本人は本音でものをいわないので信用できない、他の日本人と自分は考え方が違うような気がする、日本語を日本人と話すとても疲れるし、話しづらい、何を話したらいいかわからない、言葉がでてこない、などの記述回答があった。

6)卒業単位の科目を日本語、英語どちらで受講したいか（注10）

高等教育のための言語手段として帰国生自身がどちらの言語を使いやすいと考えているかを知ることがを目的とする。

表9：

受講したい言語	日本語で	英語で	半々	不明	総数
人数（人）	39	26	2	7	74

日本語で取りたいという帰国生がやや多い。

3. 意識構造

次に帰国生が日本帰国後に生活や環境に関してどのように感じているか、そし

て将来についてどのように考えているかを調べた。質問の多くは自由記述回答も求めたので、様々な意見が述べられた。記述回答部分に関しては記述回答の項（Ⅳ 5）でまとめる。

1) 帰国後に感じた生活や環境

学生の帰国後の日本あるいは外国に対する評価、認識を知り、日本語学習との関連を探ることを目的とし、a. 東京の生活について、b. 帰国して感じたこと、c. 海外と日本の生活が与えた影響、d. 国籍を意識するかどうか、e. 自然な気持ちになれる国はどこか、f. 海外生活体験はプラスだったかマイナスだったか、について質問した。

a. 東京について

日本の生活の下記の項目について5～1の数値で回答させた。

(5=大変よい 4=ややよい 3=ふつう 2=やや悪い 1=悪い)

項目：住宅、交通、道路、公園、都市美、図書館、スポーツ施設、電話、公衆の手洗い、騒音、治安、芸術、娯楽、余暇、文化的刺激、清潔さ、マナー、買物、学生生活（クラブ、サークル、アルバイトなどを含む）、宗教的生活、交友（私的）関係における対人関係、公的な場での対人関係。

その結果、大変よいとして選択されたものは治安、娯楽、電話、買物、学生生活、悪いと選択されたものは住宅事情、道路、公衆の手洗い、騒音であった。記述回答にさまざまな意見が書かれた。欧米に滞在した者とアジア等に滞在した者の回答は異なる可能性が強いが今回はその比較は行わなかった。

b. 帰国して感じたこと

日本に対する感情、およびカルチャーショックの経験の有無を探る。質問項目は次の3つである。（記述回答）。

- ① 帰国して一番困ったこと、とまどったこと、いやだったこと、がっかりしたことは何か
- ② 帰国して一番満足したこと、うれしかったこと、よかったことは何か
- ③ 日本のくらし方ややり方で受け入れられないこと、理解できないことは何か

c. 海外の生活と日本の生活が与えた影響

ここでは、文化、習慣の相違および言語に対する学生自身の行動と意識を尋ね、帰属意識（アイデンティティ）を考える。「特別日本語」を受講した帰国生の中に自分がどこ（の国）に属しているのかわからないと述べた学生がいた。そのような学生は言語を学ぶ時どのような目標を持って学ぶのだろうか。帰国生のための日本語教育はどうあるべきかを探るために次の質問をした。（記述回答）。

- ① 日本国内と海外に暮らして生活習慣や言葉が問題を起こしたか

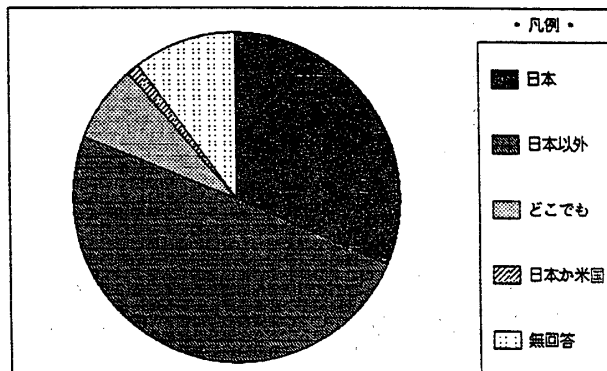
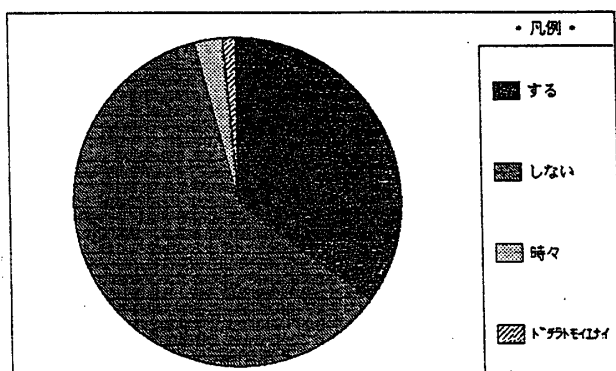
- ②外国で生活していた時に評価されたりほめられたりしたことがあるか、逆に注意を受けたことはあるか
- ③国内または国外で差別あるいはいじめを受けたことがあるか

d. 国籍を意識するか。

意識しないと答えた帰国生が61%、すると答えた帰国生が35%であった。

図8：国籍を意識するか

図9：自然な気持ちになれる国



e. 自然な気持ちになれる国はどこか。

日本と答えた帰国生が25%、日本以外と答えた帰国生が39%であった。
(理由については記述回答を参照)。

f. 海外生活体験はプラスだったかマイナスだったか。

プラスと答えた帰国生が93%であった。(記述回答参照)。

2) 将来への希望、展望

どんな仕事をしたいか。(記述回答参照)。

4. 日本語学習

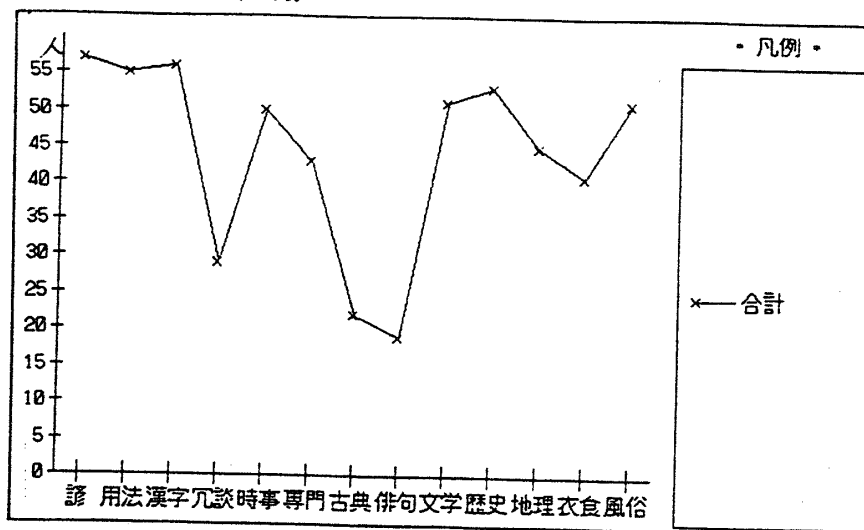
帰国生が日本語、日本文化の分野でどのような知識を増やしたいと考えているかを知るために質問をした。この項は以下の13項を選択肢として用意した。

ことわざ、言葉の用法、漢字、冗談、時事用語、専門分野の基礎語彙、古典の知識、俳句・短歌、文学、歴史、地理、衣食住、風俗・習慣。

表10：ふやしたい知識(数字は人数/複数回答)

諺	用法	漢字	冗談	時事	専門	古典	俳句	文学	歴史	地理	衣食	風俗
57	55	56	29	50	43	22	19	51	53	45	41	51

図 10：ふやしたい知識



ことわざ、用法、漢字、時事用語、専門用語、文学、歴史、地理、風俗などが増やしたい知識の項目として選択された。複数回答。

5. 記述回答

設問 3. (1) b, c, e, f 及び 3. (2) に関する結果を述べる。学生の回答は同傾向のものをまとめた。

3. (1) b ① 帰国して一番困ったこと、嫌だったこと、がっかりしたこと
*この項については、見やすいように回答を同じ系統のものに分けて示すことにする

1) 生活環境の物の側面

(数字は同傾向の回答数)

- ・混んでいる・満員電車・人が多い・渋滞 2 2
- ・道の狭さ(いつも緊張している)・せかせかしている 6
- ・何もかも小さい・狭い(狭くてきたない) 6
- ・物価が高い 4

2) 生活環境の心情の側面

- ・人込みでぶつかっても挨拶しない(思いやりがない) 6
- ・集団で同じ行動をとる(個性がない・はっきりものを言わない) 6
- ・日本語・日本社会・文化に違和感を感じる 3
- ・習慣と人間関係の複雑さ 1
- ・マナー(立ち小便・痴漢・唾を吐く・酔っぱらい・など) 5
- ・男性が威張っている 1
- ・日本の学生に学習意欲がない 1

3) 帰国子女に対する反応

- ・他の日本人から変な目で見られる(日本人なら日本語を話せ) 4
- ・外人とよばれた・帰国子女と特別に見られる 2
- ・英語ができると妬まれる 1
- ・帰国子女と外国人に対してとる態度が違う 1
- ・9月生は特別扱いだと思われている 1

4) 帰国生自身の問題

言葉

- ・日本で常識であるとされる知識がない 3
- ・きちんとした日本語が話せない 1
- ・日本語力が低い 1
- ・英語をキープしたいができそうもない 1

生活

- ・アパート探し 1
- ・クラスがグループに分かれている 1
- ・寮生活に慣れない・寮のお風呂 2
- ・自炊の生活・健康的に暮らせるか 2

帰国して嫌だと思い、がっかりしたことの第一は、東京の混雑と過密である。

- 1) の上位3項目にあげられたのはすべて過密の問題で、回答数38のうちの34を占めた。そうした中で一様な行動をとる集団には、個人の顔がないように感じられ、違った人々に対する日本人の冷たい反応とマナーの悪さが目につくようである。帰国生自身の言葉に対する不安、生活に対する不安も述べられている。
3. (1) b ①に対する回答は、次の帰国して満足したことは何かという質問
3. (1) b ②に対してより、はるかに回答数が多く問題も細かい点に渡っていた。それは違った環境に入る場合に否定的な反応が非常に大きいことを示すものであろう。

3. (1) b ② 帰国して満足したこと、嬉しかったこと、よかったこと

1) 生活環境の物の側面

- ・物が豊富・買物の楽しみ・店は遅くまで開いている 9
- ・車がなくてもどこへでも行ける(他人に頼らない・交通の便) 8
- ・治安がいい 6
- ・日本食がおいしい 5
- ・面白い物が沢山ある・テレビなど 4

- ・英語のアルバイトができる 2

2) 生活環境の心情の側面

- ・昔の友人に会えた 13
- ・家族との生活 8
- ・良い友だちができた 4
- ・日本語でやっていけるから誤解がない(祖国に住める) 4
- ・自分が外国人でなくなった 2
- ・人々が正直・親切 2
- ・本当の日本人の行動を見ることができた 2

3) 帰国生の学生生活

- ・帰国子女の友だちで互いに理解できる 3
- ・大学生活に入れた・ICUに入った 4
- ・学校生活が楽しい 1

・学校外で人と会える（色々な刺激）	3
・日本語が上達した	1
・自由（お酒・一人）	2
・趣味を追求できる	1

帰国して満足し嬉しかったことについては、家族や友人に会えた喜びと安心の思いが回答にあふれていた。豊かな日本、安全な日本という印象も強く出ている。特に帰国生として、海外で体験した苦楽を共感することのできる友達に会い、その経験から得たものを生かせると感じていることが、回答の具体例から読み取れる。

3. (1) b ③ 日本の暮らし方ややり方で受け入れられないこと、理解できないこと

1. たて社会（先輩後輩・上下関係）・男上位の社会	8
2. 自分の言いたいことを言わない（議論に時間がかかる）	7
3. 見栄をはる・表面的・形式的（結婚式・葬式・中元・歳暮等も）	6
4. 流行を追う（服装・慌ただしい）	4
5. 混雑・ラッシュアワー	4
6. 人に冷たい（思いやりがない・目があっても笑わない）	4
7. 物質主義・何でもありすぎる	3
8. 物価が高い	3
9. ゆとりのある生活ができない（あらゆる面でせかせかしている）	3
10. 個人差を認めない・みんな同じようにする	3
11. 教育制度は歪んでいる	3
12. マスコミの圧倒的な力	3
13. ばか丁寧な敬語	3
14. 大学生は親離れしていず遊んでばかりいる	2
15. なぜ控え目なのか	2
16. 下らない噂話	2
17. 消費税	2
18. Informalな付き合いができない	2
19. 寮生活で伝統にこだわり過ぎる	2
20. 保守的な考え、常識を振りかざす	2
21. テーブルマナー・その他のマナーの欠如	2
22. 性教育の後れ・セックスがタブーなのに外では野放しである	2
23. 寮のお風呂	1
24. 未成年の飲酒	1
25. 下品なジョーク	1
26. 門限	1
27. 若者社会	1
28. 警察が弱い	1

何が受け入れられないかという質問に対しては、日本の社会の在り方を批判する様々な回答があった。帰国して困ったことについては、過密の問題が第一であったのに比べて違った結果となっている。物理的に制約のある環境（過密）という面の問題は仕方がないと受け入れても、生き方の価値判断にかかわる社会の在り方、モラルの点では妥協できないと考えるからであろう。ここには日本の現在

の社会的な問題点が浮き彫りにされていると言えよう。物が豊富であるという感想（3.（1）b②）はそのまま、どこかおかしいのではないかという批判になり、相手に敬意を表し尊重するという日本人の一般的姿勢も、彼らにとっては形式的なもので、人間本位の気楽で自由な付き合いを阻害するものとなっている。自分の言いたいことを言わない、なぜ控え目なのかという記述には、大きな欲求不満が感じられる。

3.（1）c① 生活習慣や言葉の違いによる問題があったかどうか

外国で

- | | |
|---|-----|
| 1. 始めは話しが通じなかった・授業が分からなかった（仏日から久しぶりにもどって英語が出なかった） | 1 2 |
| 2. 授業中に発表することに慣れるのに時間がかかった | 2 |
| 3. 友だちがなかなかできなかった | 3 |
| 4. 積極的になれなかった | 2 |
| 5. 謙遜を真に受けられてしまう・ずうずうしさに負けないように努めた | 2 |
| 6. アメリカの習慣（規則がなく自由）に慣れるのに | 1 |
| 7. 友だちの行動が理解できない・ルームメートとの行き違い | 2 |
| 8. 日本の丁寧さから堅苦しい人と思われた | |
| 9. 駅員から差別を受けた | |

日本で

- | | |
|---|---|
| 1. はっきりものを言い過ぎる | 7 |
| 2. 講義が分からない | 3 |
| 3. たくさんの分からない言葉・漢字（読めない・書けない） | 5 |
| 4. 目上に敬語が使えない（信用がなくなる・先輩との問題） | 5 |
| 5. 日本語力不足で話せない・相手の言うことが分からない | 3 |
| 6. 英語が混ざってしまう | |
| 7. 名前を覚えるのに苦労 | |
| 8. 皆の気持ちが狭くて合わない（日本人はそんなことしない・ピアスをしていたとき・外国の方が上だと言っているようだという非難・いじめ・友達のお母さんが遊ばせてくれない・JRで英語を話した時） | 7 |
| 9. 誤解されやすい | |
| 10. 知らない人に話し掛けると相手が戸惑う | |
| 11. 外国の習慣でドアを押さえていてドアガールのようになった | |
| 12. 日本の礼儀作法 | |
| 13. 大学のやり方がアメリカと違う | |
| 14. 何でも中途半端の感じがする（自分が） | |

外国での問題で一番多かったのは言葉の問題で、次にアメリカ・ヨーロッパ社会の積極的生活態度と控え目な日本の伝統的生活態度とのずれから生じる問題である。能動的に対応しなければ個人の存在が希薄になってしまう社会で苦労し、訓練されてきたことが分かる。外国生活で特に注意された点も、主体的な自己主張のない点に集中している。逆に、日本に帰ってきた場合は、この主体的な自己主張が、円滑な人間関係を妨げる要因となるのである。帰国してからの言葉の間

題の中で、特に敬語が不十分だと自己診断している点とも関連する。その他日本人の側に、帰国生の日本的でないことに対する神経質な反応が数多くあることが回答の中から読み取れる。

3. (1) c ② 外国で生活していた時評価されたこと、逆に注意されたこと

評価されたこと

1. 日本語ができる・二か国語以上ができる	14
2. 真面目・ものごとをやりとげる・責任感	10
3. 勉強がよくできる(頼られる・助ける・模範生)	10
4. 新しいことを受け入れる	8
5. 美術(絵がうまい・器用)	7
6. 努力と勤勉・熱心さ	7
7. やさしい・思いやり・人のことを考えている・人種差別をしない心	6
8. ピアノ(音楽・バイオリン)	6
9. スポーツが何でもできる	6
10. 数学ができる	5
11. 英語(文法・発音・短期にマスター・外国語で勉強)	5
12. 字がきれい	4
13. 礼儀正しい	3
14. しっかりしている	2
15. 自分の意見をしっかり言う	2
16. 自分のペースを守り惑わされない・けじめがある	2
17. 独立心・一人暮らし	2
18. 臨機応変	1
19. バランスよく物事をこなす	1
20. 明るさ	1
21. 生徒会のリーダーシップ	1

注意を受けたこと

1. もっと意見を・もっと話せ・討論に参加を	12
2. 引っ込み思案・恥ずかしがり・はっきりしない	11
3. もっとリラックスするように	3
4. 日本人としてのアイデンティティーを失うな	3
5. 日本語をきちんと使え	1

外国で評価されたことについての回答には、一般に日本人の良い面といわれる点が数多く挙げられていて、印象的である。反対に注意を受けたことは、個人的なものを除くと積極的に自己主張をするようにという一点に絞られる。日本人としてのアイデンティティーを失わないようにと言う注意も複数の学生が受けている。

3. (1) c ③ 日本あるいは外国で差別やいじめを受けたことがあるか

日本で

1. アメリカ人、外国人、変な日本人と言われた（違った人間という扱い） 1 2
2. 無視される 2

外国で

1. 日本人、または中国人、東洋人と見られて（ある時、つば、石などを・ 8
また隣席を拒否される 等）
2. なんとなく（店員の扱い、ジロジロ見られる） 4

日本でのいじめは異質な分子に対するものであり、外国での差別は有色人種に対する差別を表していると言えよう。

3. (1) e どの国にいる時自然な気持ちになれるか、それはなぜか

日本

1. 日本人だから・日本で育った・母国・長いあいだ住んだから 7
2. 自分だけ違うという意識を持たない 4
3. 家族・友人・知人が日本にいる 5
4. 日本人でなければ分からない文化がある 2
5. 言葉が通じる（一番自分を表現しやすい） 2

外国

1. 自分自身でいられる（こうあるべきという外圧がない・人間関係が楽） 1 0
2. 自然が美しい・広い・いい気候 9
3. 両親・友人がいる 5
4. 生活に慣れている 4
5. 自分の育った所 3
6. 言葉に問題がない 3
7. 食べ物が好き 1

どちらでも

- + どこでも自然な気持ち
- + 日米どちらでも
- 日米どちらも馴染めない

自然な気持ちになれる国は、アメリカがトップで18人が挙げていた。その他はタイ3人、スペイン2人で後は1人ずつ、カナダ・シンガポール・フランス・スウェーデン・台湾・イギリス・オーストラリア・バハマ・南アフリカを挙げていたが、これはほぼ被調査者の滞在国の分布に対応するものである。日本以外の国がいいという回答の理由の中で最も多いのは、自分自身でいられること、そして自然の美しさと広さがこれに次ぐ。周りに合わせなければならないという有形無形の制約を、帰国と同時に感じ取っている様子がうかがえる。これに対して、日本に住みたい理由は、人種的に自分だけ違うという意識から自由になり、外国人でなくなったと安心する気持ちを示している。日本人だからと言う、やや漠然とした理由も、上記の思いと重なるものであろう。

3. (1) f 海外生活はプラスだったか、マイナスだったか

プラスだった

1. 英語の力がついた（それによって考えが深まった）	27
2. 視野が広がった（考えが・心が・世界が・興味が）	20
3. 異文化との接触によって学んだ	14
4. いろいろな体験をした	11
5. さまざまな価値観・世界の存在に気づいた	8
6. 友だちができた（文化の違いを越えて）・色々な人と接した	11
7. 日本のことが分かってきた	7
8. 他の国の人の考えを受入れ理解できる・Biculture になった	4
9. 日本だけにとどまらず、どこにでも行ける自信がついた	3
10. アメリカ人として暮らせた・アメリカ風に生きていける	2
11. 自由な環境で伸び伸び育った	
12. 努力の成果が現れることを知った	
13. ものをはっきり言うようになった	
14. 独立して生活し他の人の目をはばからなくていい	
15. 人間のよさが分かった	

マイナスだった

1. 自分の国、故郷が無い感じ
2. 漢字が書けない
3. 絶えず劣等感がある
4. 常に出会いと別れがあるので、無感動でいようとする態度を作ってしまった

マイナスが例外と思われるほどプラスの回答が圧倒的多数であった。視野が広がった、異文化との接触によって学んだ、いろいろな体験をした、さまざまな価値観・世界の存在に気づいた、の 2、3、4、5 の回答を合わせると、63人（85%）の学生が海外生活の体験そのものを肯定している。この評価と英語力がついたという回答は、やりたい仕事についての回答と併せて読んでみても、大きな影響を将来の展望に与えていることがうかがえる。ただし、ICUの帰国生が海外と言う時、それはほとんど英語圏を指すものであることを、プラス回答の内容を考える時に考慮する必要があるだろう。また、マイナスと答えた学生の理由は、プラスと答えた学生の気持ちの中にも認められるものであり、マイナスの回答の場合でも全面的な否定であるとは言えないだろう。しかしこの理由の中に帰国生が持つ一般的な不安の様子を見ることができると思う。

3. (2) 将来やりたい仕事

1. 外資系の会社・外国と関係のある仕事・国際ビジネス・国際銀行・貿易
世界のいろいろなところに行ける仕事

14

2. 英語を使って移動性のある仕事（日米を→3）	13
3. 芸術関係（音楽→2・レコード→1）	7
4. マスコミ・メディアの仕事（編集・ジャーナリスト・アナウンサー）	5
5. 国連	4
6. 通訳	3
7. 教師（英語の・発展途上国の）	2
8. サラリーマン以外（時間に拘束されない仕事）	2
9. 総合職（やりがいのある）	
10. 経営コンサルタント	
11. ステュワデス	
12. 会計士	
13. 金融関係	
14. 外交官	
15. 化学の研究所	
16. 結婚してもできる仕事（世界のどこでも）	

ほとんどの学生が海外生活で身につけた語学力（主として英語）を使って、国際的な場で仕事をしようと考えている。一般の日本人大卒者が、大企業を選ぶ安定指向であるのに比べて大きく違う点である。それは外国生活の経験が彼らに自信を与えている証拠でもあろう。語学力だけでなく、様々な文化圏での生活が視野を広げ、対応を可能にし、また差別や生活の格差を見てきたことが、仕事を通じて世界に貢献しようとする使命感をも作り出しているのかもしれない。 3.

（1）fの海外生活のプラス、マイナスを問う質問に対して圧倒的にプラスが多いことからそれは推測できる。

V おわりに

特別日本語コースが開講されてから27年を経過し、当初インターナショナルスクール出身者を対象としたクラスは大きく変化した。今回の調査は、特に帰国生の生活面、及び言語生活の面を中心に行った。これによって現在の帰国生像の輪郭が多少なりとも明らかになり、彼らの抱える問題に柔軟に対応するための手掛かりを提供することができればと考えている。さらにコース内容を検討し一層の充実をはかるためには、帰国生の日本語力を把握するための総合的な言語の調査が必要である。生活面の現状と、日本語の問題の所在を明らかにすることによって効果的なカリキュラムの編成が可能になるであろう。

謝辞：長い間、責任者として「特別日本語」に係わってこられた金井英雄教授には、この調査の実施と本稿をまとめるに当たっていろいろな御助言をいただき大変お世話になった。ここに感謝の意を表する。

注

- 1) 両親の仕事の都合などで外国にある期間滞在した後に帰国する子供達のことを、普通一般に帰国子女と呼んでいるが、多くは義務教育年齢の子供達のことをさす。大学で学ぶ学生にたいしては帰国子女（石垣、1987；孫福、1983；山本、1985）、帰国学生（稲垣、1987）、などの呼び名が使われているが、本稿では短く「帰国生」と呼ぶことにする。
- 2) 現地校、国際学校の高校卒業者に対して、国内大学が特別な入試方法によって、入学を許可する制度。
- 3) 通常の入学事務（4月入学）においては書類上海外滞在歴が明らかになるような項目はないので、大学側は4月入学生の中の帰国生のはっきりした数はつかんでいない。それに対して9月入学の場合は、海外滞在歴が2年以上の者が対象なので、ほとんどが帰国生と考えられる。「300名程度」というのはそのような事情から概算している。
- 4) この調査を行った1988年度、1989年度には免除学生はいなかった。
- 5) 性別、年齢など被調査者固有のことがらをいう。
- 6) 帰国生であっても、4月入学の学生、「特別日本語」免除学生、「外国語としての日本語」コース登録者はこの調査の対象からはずした。また「特別日本語」受講者であっても海外滞在経験のないインターナショナルスクール出身者、国籍が日本ではない学生、および両親、あるいは片親の母国語が日本語でない学生はこの調査の対象からはずした。多様な要素をなるべく排除したかったからである。
- 7) 「特別日本語」が開講される学期はそれぞれ1が秋学期（9～11月）、2が冬学期（12～3月）、3が春学期（4～6月）なので、1から登録の学生は秋学期から始め、2→3へと進む。3からの学生は秋と冬は登録する必要がなく、春学期から登録するので、秋、冬の「特別日本語」には在籍しない。このように異なった時期に登録する対象学生と接触するために、今回の調査では、次の3期に分けて、データを回収した。
- 8) 客観的に把握することが可能な質問項目を特にフェイス項目と呼ぶ。これらの質問項目が、調査表の顔（フェイス）に該当する第1ページ目におかれることが多いためである。フェイス項目の役割は1)回答内容の異なりを説明する要因を示す、2)回答者に偏りがないかどうかを確認する基準を示す、の2点が挙げられる（辻・有馬、1989）。
- 9) 補習校については長谷部（1985）に詳しい。一般に補習校というと現地校の休みにあたる土曜日を使って主に国語・算数などの補習を行う場合が多いが、それぞれの補習校によってカリキュラムや曜日は異なる。また小学校・中学校・高等学校のどのレベルまでを持つかというのも各補習校で異なる。
- 10) ICUでは卒業単位となる科目が学期によって英語（多くは外国人の教官による）あるいは日本語（日本人の教官による）で講義されるので、学生はいずれかを選ぶことが出来る。

参考文献

- I C U 日本語研究室 (1987) 『あすの日本語教育の道を求めて』 凡人社。
- 池田重・山崎玲子 (1982) 「帰国子女の日本語の問題点に関する研究 (1)」
『千葉大学教育学部紀要』 31巻-1 pp.31-55.
- 石垣貴千代 (1987) 「大学に於ける帰国子女の日本語教育とその問題点」 『あすの日本語教育の道を求めて』 凡人社。 PP.86-90.
- 稲垣滋子 (1987) 「帰国学生の日本語学力の測定」 『あすの日本語教育の道を求めて』 凡人社。 pp.91-103.
- 小出詞子 (1987) 「I C U 日本語教育の30年」 『あすの日本語教育の道を求めて』 凡人社。 PP.5-15.
- 小林哲也 (1980) 「海外帰国子女の適応」 『現代のエスプリ：カルチャー・ショック』 至文堂。 161号 PP.83-101.
- 小林哲也 (1981) 『海外子女教育・帰国子女教育』 有斐閣新書。
- 小林哲也編 (1983) 『異文化に育つ子どもたち』 有斐閣選書。
- 総務庁行政監査局編 (1988) 『帰国子女教育等の現状と問題点』 大蔵省。
- 辻新六・有馬昌宏 (1989) 『アンケート調査の方法』 朝倉書店。
- 東京学芸大学海外子女教育センター (1986) 『国際化時代の教育－帰国子女教育の課題と展望』 創友社。
- 長谷部正治編 (1985) 『海外子女教育マニュアル』 海外子女教育振興財団。
- 羽田野洋子 (1986) 「帰国子女の日本語力」 『日本語と日本語教育』 慶応義塾大学国際センター。 14号 PP.47-67.
- 星野 命 (1980) 「帰ってきた私たち－帰国学生の自叙伝から－」 『現代のエスプリ：カルチャー・ショック』 至文堂。 161号 PP.223-231.
- 星野 命 (1983) 『異文化との出会い』 川島書店。
- 星野 命編 (1980) 『現代のエスプリ：カルチャー・ショック』 至文堂。 161号。
- 孫福 弘 (1983) 「慶応義塾大学の帰国子女入学制度」 『海外子女教育』 海外子女教育振興財団。 121号 pp.30-32.
- 箕浦康子 (1984) 『子供の異文化体験－人格形成過程の心理人類学的研究』 思索社。
- 文部省 (1979) 『海外子女教育の現状』。
- 山本順子 (1985) 「慶応義塾大学における帰国子女研修課程を担当して」 『海外子女教育』 海外子女教育振興財団。 148号 PP.50-52.